



ブック

情熱と粘り強さ、マインドフルネス「今ここに」注意を向けて受け入れる力、レジリエンス「逆境を」しなやかに生き延びる力など、15項目の心理学用語を挙げ、それぞれの測定方法、介入などによる変容、教育への示唆について述べたものである。

編者は、ある心理特性が全ての良い結果につながるわけではなく、何が良い結果をもたらすのかは時代や場所によっても異なる可能性があり、誰の人生にとっても万能な、良い心理特性が存在するわけではないと言う。また、本書で非認知能力として取り上げた心理特性の中には、あまり望ましくない心理特性と関連するものもあるとしている。さらに、



非認知能力

概念・測定と教育の可能性

小塩真司 編著
2860円 北大路書房
☎075-431-9393

(前)聖徳大学教授・西村美東士

ではあるが、

理学的尺度に基づいて評価されている。だが、教育の現場にあっては、非認知能力といえども教育可能な「教育目標」を設定して、その到達度を可視化することが不可欠だと考える。もちろん、可能な範囲でという前提ではあるが。

それは心理学の尺度とは異なるものである。本書では、教育効果が主に心理学的尺度に基づいて評価されている。だが、教育の現場にあっては、非認知能力といえども教育可能な「教育目標」を設定して、その到達度を可視化することが不可欠だと考える。もちろん、可能な範囲でという前提ではあるが。

社会から注目されることはさまざまな形で研究活動に影響を与えていくとし、多くの心理特性が非認知能力としてひとまとめにされてしまうことを懸念する。

本書で述べている非認知能力に関する教育の可能性とは何だろうか。確かに、「社会からの要請」に応えるというプラスの側面とともに、それに振り回されるといふマイナスの側面もあるだろう。

これに対して、教育者の立場からは、教育的価値に基づいた「教育目標」の設定が不可欠だと評者は考える。